エラスムス像

栃木県佐野市上羽田町
竜江院所蔵

エラスムス像は語る

宮下　良明

エラスムス像伝来について

草深い栃木県の西南端にある禅宗龍江院の山門をくぐると左手に小さな観音堂がある。此の観音堂に徳川の初期から大正の末期迄観音様と一緒に「カテキ様」と云う木像が安置されていた。

むずかしく云えば「貨狄尊」である。だが、土地の人達の付けたあだ名は「アヅキとぎ婆（ババー）」と云った。夜中にお堂の中でザツザツとアヅキをとぐ様な音がすると云うのである。子供達が親の云う事を聞かない時は、アヅキとぎ婆がやって来るぞと驚かされたものだそうだ。

それだけではなく、此のカテキ様は夜な夜な「ムジナ」に化けては村内をうろつき、村人をだましたとか「チャンピロリン」「チャンピロリン」と歌ったとか。とにかく村人にとっては、何とも得体の知れない仏像であったのである。

こういう因縁で、エラスムス像はある種の仏様と間違えられ、村人達に怖わがられ、腰の小穴はムジナに化けた時、村人達に鉄砲で撃たれた傷だなどと言われていた。

此のカテキ様を広く世界に紹介したのは栃木県の考古学者の草分けである足利市の故丸山瓦全（ガゼン）氏で、丸山

氏は、これをキリシタン宣教師と、考古学者坪井九馬三博士の教示により「カテキ様」とは、カテキスム（カトリック教の教理を問答体でやさしく書いたもの）又は、カテキスタ（信者と教理問答を行う役僧）から出た名前だろうとの説を述べ、又、新村博士は、これは中国の伝説で、船の発明とされている「貨狄（カテキ）」のことであって、そう呼んだのであろうと推定している。

これがきっかけとなり、これ迄人知れず埋もれていたこの木像が、学者達の注目を集めるようになったのである。

更に、エラスムス像の写真が、大正十三年のクリスマスから二年間、パチカン市で開かれた世界の宗教博覧会に「在日本キリスト教聖人像」として出品され、西洋の学者達の注目を引き、村上直次郎・新村出両博士等の南蛮学者や駐日オランダ公使通訳官スネレン氏等の研究により、実は、オランダが生んだ偉大なる人文学者デリウス・エラスムス・ロッテルダムス（一四六九ー一四三六）の木像であることが分かった。顔つきがハンス・ホルバインやアルプレヒト・デューラーなどの巨匠が描いたエラスムスの肖像によく似て居り、また、木像の手に持っている巻物には（R……TTE……M……一五九八）とあって、これが「エラスムス・ロッテルダム」と判読されたからだ。大正十五年のことである。

それでは、何故此のオランダ船に付いていたエラスムスの像が、海のない県の栃木県にもたされたのか、それには色々と異説もあり、詳細は分からないが、エラスムス像は、リーフデ号の船尾像で、臼杵城主太田一吉に贈られたが、その年、関ケ原の乱が起ると、石田三成に味方した一吉は、隣接の岡城主中川秀成に攻められて、像を城に残して逃げ出し、臼杵には稲葉氏が封ぜられた。

やがて寛永十四年（一六三七）島原の乱が起ると、城主稲葉一通はいち早く、当時、府内（大分市）に居た幕府の目付役牧野仏蔵成純（シゲズミ）を通じて幕府に報告。その報知が敏速だったということで、幕府より賞美を受けた。

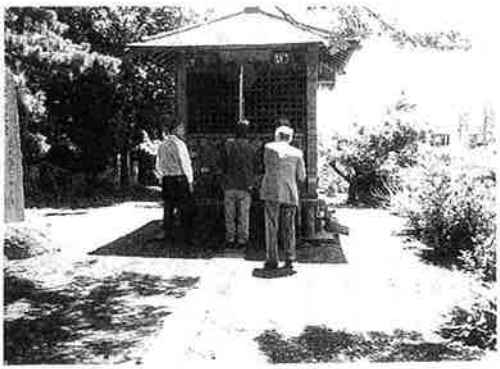
そこで、稲葉一通は感謝の意を表わす為、軍監として島原へ赴いた牧野成純が江戸へ帰る時、臼杵城内に置かれていたエラスムス像を贈った。この牧野成純の菩提寺が龍江院で、成純が像を龍江院に納めたのである。

エラスムス像は、昭和五年に国宝に指定され、同時に東京博物館に寄託し、現在に至っている。その後、昭和

二十五年、国の重要文化財に指定替えになった。

此のリーフデ号には三浦按針（ウイリアムアダムス）及びヤンヨーステン等の人々が乗船していた。

栃木県佐野市上羽田町一二四二
龍江院住職　大　沢　雄　鳳
ＴＥＬ　三ー六〇六二



以上がエラスムス像伝来説であるが、後続の太田一吉公のくだりからは、臼杵市の歴史家、故久田羅木儀一郎氏の御説を祖文したと書いている。故岡田章雄東大教授及び故久田羅木儀一郎先生の研究、臼杵史談五十四号、それを基に黒島上陸記念碑を、昭和四十一年に建立しているのであるが、筆者としては、エラスムス像臼杵城内存在説は、どうしても納得の出来ない点を幾多感じるのである。その理由は次のとおりである。

その第一は、昭和五十四年三月、栃木県佐野市の文化財（佐野市教育委員会発行）第七頁に、木像エラスムス像をのせたリーフデ号は佐伯湾岸に漂着したと明記してあり、しかも、エラスムス像建立後十二年経った今でもなおかつ佐伯湾岸漂着を解説文に示しているのである。それは、最初にこの像を研究された足利市の学者、故丸山瓦全先生の記録に、何等かの形で佐伯湾岸漂着説が書き残されていたものと思われるのである。その後、丸山瓦全氏宅は火災にあって全焼したという。その為、書籍や色々な記録類も一緒に焼失したの

ではあるまいか。さすれば、当然佐伯湾岸漂着説は書き替えることは出来ないのである。また、佐野市の龍江院境内にある牧野氏の墓碑もしかと研究する必要があるのではないか。

第二、リーフデ号漂着時の豊後の王とは太田一吉公であり、大友亡き後、幾人目かの臼杵城主である一吉の人間性を書物などで見る限り、領主としては名君と言えるのではないか。何故ならば、豊臣秀吉の朝鮮侵攻に際しては、膨大な人員と物資が朝鮮海峡を渡った。その人員と物資は、自国領内の領民であり年貢であろう。物資の調達をするならば、領内の験地を行わなければならないその験地を、当時豊臣蔵入地であった佐伯荘を含めた自領を調べているのである。いかに重大であり、かつまた困難であったか申す迄もない。しかも、自ら朝鮮に部下を率いて出向き、臼杵安養寺の住職慶念に戦死者の弔いをさせ乍ら、その生々しい従軍日記を書かせているのである。この辺にも、一吉公の人情の豊かさが感じられる太田一吉公の人柄は、リーフデ号の乗員をすぐに上陸させ、適切な処置を講じたことも明白である。また、ウイリアムアダムスが妻に宛てた手紙を見ても実に寛大な人物であったことは疑えない。

アダムスの手紙を一部紹介すると（前文は略す）

……着いて二、三日後我等は良港（臼杵）に曳港され全島の主王（徳川家康）が我等の報道を受取り彼の意向によって如何に我等を処分すべきかが分明する迄同処に滞在することに成りたり。其の間我等は同地の王（太田一吉）の好意を求め船長と病人とを上陸せしむる事を乞い許可せられたり。次いで住所も宛がわれ我船員はこれに横たわり食糧も給与せられたり……

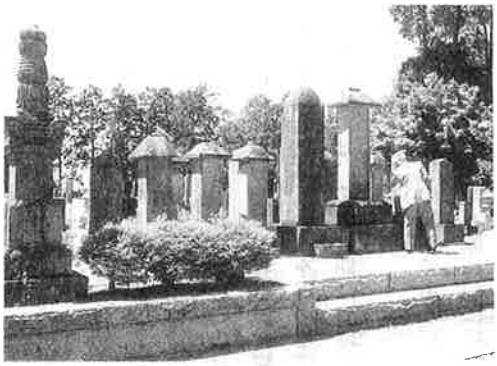
……

アダムスの妻に宛てた手紙の一部分であるが、豊後の王太田一吉の好遇に対しての感謝がありありと受取られるのである。そしてまた、一吉自身の知友であり乍ら、臼杵太田勢に対して合戦をいどんだ、竹田中川勢を迎え撃つにしても、身は一括して西軍豊臣方であり、時すでに関ヶ原の合戦を待つ迄もなく、世はすでに徳川家康の手中にあり、中川勢と合戦をまじえ、その戦果はどうであれ、豊後の臼杵城に君臨することは出来ない事は百も承知していたのであろう。これは、即ち住民の安住の為、戦火を交えず、ただただ進路のみを切り開き京都へ上っ

たその行為は実に見上げたものではあるまいか。

太田一吉公の人と成りを想うとき、朝鮮渡航の際、幾多の船にも船神様として乗船者の安全を祈願、信心をし祭られている守神と同様、現存する船にはなくてはならない神である。その事は充分知って居た事と思うのである。

かかる数々の人間性を思う時、リーフデ号がまだ自航能力の充分ある時、家康より沙汰を待つ迄もなく、臼杵の港で船の護り本尊であるエラスムス像を簡単に取り外したとは思えないのである。



また、取り外ずされていないとすれば、その先が見えて来るようだ。次の寄港場所が大阪堺港である。此処でもまだリーフデ号は健在であった。さすれば、最後とされる港は浦賀ということになる。その二つの港のどちらかの港で取り外ずしたとも思えるのである。

佐野市龍江院に持ち帰ったと伝えられる人、牧野伝蔵成純。この人の伝説は、故久田羅木先生の言葉を引用した龍江院のエラスムス像伝記で書いたが、しかし、この伝記が、実は筆者の疑問点でもあり、少々首をかしげざるを得ないのであるが、最後に坂本満先生の「聖エラスムスとエラスムス像上」、この論文をお借りしていうなれば、

「英人のアダムスはその学識と人柄とによって家康の寵遇を受け、家康に幾何学を教え、命によって自ら指揮して八〇屯と一二〇屯の二艘の洋船を造った。

家康は豊臣に最後のとゞめを刺す為に鉄砲や鉛・火薬を周到に準備していたが、アダムスは平戸と江戸の間を往復し乍らそれに一役買っている。そればかりではなく砲術に優れていた為、寵を得たという伝えもある。

アダムス、あるいは元リーフデ号乗組員が砲術の知識を教えたとすれば、やがて慶長の十一年に「持筒頭」となる牧野成里（成純の父）との関係も考えられて然るべ

きだろう。成里は慶長十九年四月に没して龍江院に葬られた。その子成純は島原の役に、軍監となって功績があったが「持筒頭」にはならなかった。

リーフデ号が何時廃船となったかは不明である。長い航海と遠州灘での暴風雨で船体は傷んでいたという。

エラスムス像を取りはずしたのは何時だったのかも明らかではないが、それが牧野氏に帰属したのが、リーフデ号乗組員と砲卒五十人を率いる成里との交流に関係があったとすれば、その時期はおのずから限定されるであろう」

以上、坂本先生の論文であるが、筆者も成純ではなく成里がエラスムス像を龍江院に持ち帰った、即ち浦賀港で解体された際、立ちあったのが持筒頭牧野成里及びアダムスやヤンヨーステン、それにリーフデ号乗組員等であり、この解体と同時にエラスムス像も取りはずされたものであろうと思うのである。千六百年の昔、数奇な運命を背負って漂着したリーフデ号の末路である。

この時、ウイリアム・アダムスより牧野成里にエラスムス像の将来を、また、リーフデ号乗組員の数多くの死者の供養を頼むと共に、成里自らの菩提寺・龍江院に持ち帰ったものと思われるのである。

リーフデ号佐伯湾岸漂着説の後続編として記す。